

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

近代漢語の変遷と定着：  
「温度計」の語史を例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶原, 滉太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002898">https://doi.org/10.15084/00002898</a>

# 近代漢語の変遷と定着

—「温度計」の語史を例として—

言語変化研究部 第二研究室  
梶原 滉太郎

## 1. はじめに

### 1-1 目的

日本語は江戸時代末期から明治時代にかけて急激に語彙を増やし、それらによって西洋から取り入れたものごとを言い表わすことができるようになっていった。その時期に増えた語彙の多くは漢語である。このように入きな流れは明らかになっているが、それらのうちの具体的な語の歴史をたどった研究は乏しいので、自然科学の分野において変化のタイプの異なる語を取り上げて詳しく記述し、現代語として定着した様子を明らかにする。

今回の発表では、「温度計」という語形で現代に定着した語（一部では「寒暖計」ともいう）の歴史に焦点をしばって述べる。

### 1-2 方法

- ① 現代の学術用語集などを参照して、日常生活でもよく知られていると思われる語を約5,000語選び出した。それらは、数学・物理学・化学・生物学・天文学・地学の6科目にわたっている。
- ② ①の約5,000語のすべてを、④『日本国語大辞典』と⑤『大漢和辞典』の両方について調べた。  
その結果、④では室町時代とそれ以前の出典のあること、⑤では中国の近世よりも古い時代の出典のあること、これら二つの要素のうち、一つでも含む語は除外した。ただし、とくに⑤については語形が現代日本語と同じで意味の異なる語は除外しない。
- ③ ②の手続きを経て残った語について、それらに対応する英語を、学術用語集の和英の部などから確かめた。次にそれらの英語について、江戸末期から大正時代までの主要な英和辞典6点の訳語を調べた。  
その結果をよく吟味して、⑦変化の激しい語、⑧ともかく変化している語、⑨変化の乏しい語、などをとり混ぜて①で述べた6科目から合計250語を選び出した。
- ④ ③で決定した250語について、江戸時代から現代までの自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書から用例を集めた。  
さらに、語によっては、明治20年前後に多く出た各科目の専門語辞典について調べたり、江戸末期から現代までの主要な英和辞典4点について訳語を調べた。

⑤.④までの作業を進めながら各語の歴史を検討し続けた結果、江戸ないし明治時代にあらわれて現代に定着した自然科学系統の用語は、次のように分類することができると考えるようになった。

第1表 近代漢語の分類私案（自然科学関係）

A. 異語形の多い語 ... 「温度計」など
B. 異語形のやや多い語 ... 「天文学」など
C. 異語形の少ない語 ... 「比重」など
D. 語形が変化または交替しなかった語
D1. 意味は変化した語 ... 「平均」など
D2. 意味も変化しなかった語 ... 「成分」など

上の第1表に示したA～D<sub>2</sub>までの合計六つのタイプに属する語の歴史を、それぞれ詳しく記述することによって、自然科学関係の「近代漢語の変遷と定着」の大すじをとらえたい。

第1表のAのタイプの代表的な語の歴史を取り扱うのが今回の発表である。また、Bのタイプの代表的な語を扱った論文を筆者は「『天文学』の語史」という題で『研究報告集（第13集）』（'92年3月、国立国語研究所編、秀英出版刊）に発表した。なお、C～D<sub>2</sub>のタイプに属する語を扱った研究については未発表である。

## 2. 江戸時代

この第2章から具体的に「温度計」の語史を扱うものとする。

日本の文献で江戸時代より前において「温度計」というものを表わす語を見つけることは非常に困難である。それは江戸時代の末期から見え始めるのである。それらはオランダ語 thermometer または英語 thermometer の訳語として大部分が生じたわけである。具体的な語形をあげれば次の通りである。

「驗温器」・「驗温管」・「驗温儀」・「列氏驗器」・「寒暖計」・  
「寒熱昇降」・「徹羅才型測器」・「驗火器」

これらのうち、江戸時代を通じていえば「驗温器」が最も多く使われている。なお、上にあげた語形のうち最後の「驗火器」は、もっぱら非常な高温をはかるためのもので、他の7語とは区別すべきかもしれない。

## 3. 明治の初めから10年ごろまで

この時期には最も多くの語形が見られる。それらをすべてあげれば次の通りである（ただし、それらを含む熟語は省略した）。

「驗温器」・「驗温管」・「驗温儀」・「寒暑規」・「寒暑<sup>い</sup>鍼」

「寒暑表」・「寒暖器」・「寒暖計」・「<sup>カンタンケイ</sup>驗温器」・「<sup>カンタンケイ</sup>驗冷熱器」  
・「<sup>カンタンケイ</sup>寒暑鉞」・「<sup>カンタンケイ</sup>寒暑針」

この時期の様子が江戸時代と少し異なるのは主として次の2点である。

- ① 「<sup>カンタンケイ</sup>驗温器」の勢力に衰えが見え始めたこと。
- ② 「<sup>カンタンケイ</sup>寒暑鉞」系と「寒暖計」系の語が目につくようになったこと。

#### 4. 明治10年代の様子

この時期の特徴を手短かにいえば、「寒暖計」の勢力が目立って強くなったことである。

この時期に見える語形をすべてあげれば次の通りである（ただし、それらを含む熟語は省略した）。

「<sup>カンタンケイ</sup>驗温器」・「<sup>カンタンケイ</sup>驗温儀」・「<sup>カンタンケイ</sup>寒暑鉞」・「<sup>カンタンケイ</sup>寒暑針」・「寒暑表」・  
「<sup>カンタンケイ</sup>寒暑計」・「寒暑表」・「熱計」・「寒暖計」

#### 5. 明治20年過ぎから末年ごろまで

この時期は「寒暖計」の定着してゆく時期である。

「寒暖計」系統の語が栄えてゆく大きな流れの中には、次のような用例もある。

- <sup>おんけい</sup>驗温器俗に寒暖計或は熱計と称す。（通俗絵入簡易物理学（明治24年） 231ページ）
- 適当なる装置を作れば、熱電流によりて兩接合点の温度の差一度の千分の一にても、此の温度の差を測ることを得、…中略…  
精巧なる温度計を造ることを得。（中等教育新撰物理学楷様（明治39年） 297ページ）
- 太陽光線のスペクトル中にて、熱作用を検するに、熱電流温度計の如き精巧なるものを用ふれば、紫色の部分は殆んど熱作用なく（同上 198ページ）

#### 6. 大正時代から現代まで

この時期については今のところ調査が完了していないので、それが終れば二つの時期に分ける可能性がある。

現在のところ、昭和6年までは調べたが、その結果によれば辞典を除いた文献では大正時代の初めから、ほとんど「寒暖計」系統の語しか見られない。

現代の百科事典の一つである『大日本百科事典（JAPONICA）』（小学館）の「寒暖計かんたんけい」の項目の説明を見ると「温度計のうち、日常生活と関係の深い寒暖の度合いを示すのにつごうのよいような範囲に目盛りをつけられたもの。…中略…現在はもっぱら一般的な温度計の名でよばれているが、温度計の種類の一つとして体温計

などとともに残しておきたい名称である。」と述べている。

「温度計」の方が一般的な名称として使われるようになったのは戦後のことであろうと思われる。それが具体的にいつごろの時期であるかについては今後の調査によって明らかにしたい。

## 7. むすび

〈温度計〉を表わす語は、江戸時代と特に明治10年ごろまでは異語形が多く、他の語の歴史と比べても際立っている。そして、それら多くの異語形のほとんどは三字漢語である。

また、多くの異語形の見える時期においても一つの中心的な語形が常に存在していた。その中心的な存在が、コミュニケーションの混乱を最小限にとどめる役目をしていたと考えられる。

明治10年代から優勢になって、やがて完全に定着した感のあった「寒暖計」が現代において「温度計」に押されている要因の一つに、「寒暖計」という語のもつ意味領域の狭さがあると思われる。その「狭さ」とは「温度計」と比べた場合のことである。

〈温度計〉を表わす主な語形の盛衰

